春の伝道礼拝第2回（5月12日）

# 肉の約束

小海　基

エゼキエル書　第11章1～4、11～19節
コリントの信徒への手紙Ⅱ　第3章1～3節

## 霊肉二元論をめぐって

本日の説教題を「肉の約束」としました。肉と言うと何か俗っぽく思われます。一方、霊的存在は神聖で清く正しく善なものと受け取られています。肉は朽ちるもので、罪に満ち有限という価値観です。これがいわゆる霊肉二元論です。

荻窪教会の普段の礼拝では連続講解説教で創世記からイザヤ書まで進んできていますが、旧約聖書に霊肉二元論は登場しません。新約時代になってからです。ソクラテスやプラトンの哲学では、この世では霊魂が不滅で神聖、普遍的なもの。一方、肉体はその霊魂を閉じ込める牢獄のようなもので朽ち果てる、という考え方です。

ローマ帝国が支配していた新約聖書時代にはこの価値観が当時の時代を制していました。新約聖書に霊肉二元論を持ち込んだのは今日読んだコリントの信徒への手紙を書いたパウロです。考えてみれば、聖書の信仰の世界を、言葉も違えば価値観も異なる人々に説明する時、翻訳を伴いますので、こうした異教的な価値観がどうしても紛れ込んでしまいます。

パウロという人は旧約聖書を熟知し、聖書の価値観をよく理解していた人です。ダマスコ生れでギリシャ語が堪能で、地中海の人たちが聖書の世界について、どうすればイエス・キリストに一目置いてもらえるかも良く分かっていました。パウロは異邦人伝道で大成功を収めますが、最初から順調に進んだわけではありません。かつてソクラテスやプラトンが大論争した、アテネのアレオパゴスの評議所でイエス・キリストのことを宣べ伝えに来たと演説を始めます。最初、アテネの人たちはパウロの見事なギリシャ語の説教に耳を傾け囲んで聞いていました。しかし、一番肝心なイエス・キリストは死者の中から復活したのだと言う話になった途端、ギリシャ人たちは「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と一人また一人とその場を去って行ったのです。霊肉二元論の価値観からすれば、神的な存在が肉の姿をまとって人間の姿で現れる話はギリシャ神話にもありますからそこまでは理解されます。しかし十字架につけられて殺され葬られて三日目に肉体で復活するとはとても信じられないというのです。

パウロはこの大失敗を機に、皆が躓いた主の十字架と復活のこと以外は今後、何も伝えまいと、コリントの信徒への手紙で書いています。このように地中海のエリートたち、ギリシャのローマ人にとっては愚かで空虚に聞こえても、そこが大事な神の約束の部分であることをパウロは伝えます。

## 肉の約束に大事なものがあると強調するエゼキエル

今日読みましたエゼキエル書、そしてそれをコリントの信徒への手紙Ⅱで引用して語るパウロの言葉は、肉の約束に、非常に大事なものがあるということを強調しています。

エゼキエルは預言者エレミアと同時代の預言者で、イザヤより少しあとの人です。南ユダ王国のヨヤキン王や少年だったダニエルたちと共に第一回目の時にバビロニアに連れて行かれました。貴族と並ぶ高位の祭司の家系に属していました。エゼキエル書は四十八章ありますがちょうど半ばの二十四章のところで、バビロニアの地で妻を失い、祖国の南ユダ王国が滅ぼされたことを知るわけです。こ

ういう育ちの良い知識人は精神的に脆いもので、捕囚として連れてこられた結果、精神はずたずたになり精神的に病んでいたとの学説もあります。エゼキエル書は他の預言書と違って、想像できないような不思議な幻や不思議な経験が多く記されており、精神的に壊れていると思うのが自然と思われる記述が多い預言書です。

　エゼキエル書では前半で、南ユダ王国が滅ぼされるまでは神様の罰を受けてバビロニアに奴隷として連れてこられる運命にあるのだという、厳しい警告を述べています。そこで特に問題なのは、こういう時こそ、宗教界のリーダーの祭司たちが国を正していかねばならないのに、自分の祖国を先頭を切って堕落させていると非常に厳しい警告を書き連ねています。これはエゼキエル書だけの記述なので事実を確かめようがないのですが、指導者であるヤザンヤとペラトヤの二人は南ユダ王国が滅びかかったこの事態になってさえも国を食い物にしている幻を見るのです。エゼキエル書十一章三節では滅びかかった祖国を肉鍋、そしてその人々を肉にたとえます。ひどく露骨な表現です。

　しかし十一節で、この都が鍋となることも、お前たちがその中で肉となることもないと語られたその時に、首謀者ペラトヤは目の前で死にます。そして、十四節から十七節で再建の預言がエゼキエルによって示されます。この部分の言葉こそ、厳しい裁きの言葉が続いたあと、最初に出てくる希望の預言です。そして十九節で、「…わたしは彼らの肉から石の心を除き肉の心を与える」と述べます。

**エゼキエルの希望を引用してコリント教会に再建を語るパウロ**

　今日読んだ新約のパウロが書いたコリントの信徒への手紙二の三章ではエゼキエルの言葉が引用されています。これを書いた当時、パウロが苦労して種蒔きをしたコリントの教会は、あとから来た偽伝道者によって分裂状態となっていましたが、信徒に対して「墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です」（三節）と、復活の証人として励ますのです。それは石に刻まれた律法、教条化した硬直化した律法でなく、肉に刻まれた生きた言葉として肉に生きた神の言葉が息づいているではないかと語り、肉を良いものとして語るわけです。紙の言葉として神の言葉を受け取ってはいけないのです。受肉されたイエス・キリストという存在、十字架への道を苦しみ、かつ復活された神の言葉として私たちの肉体の中に種が蒔かれているのです。そしてむしろ弱いことを通してさえ力を発揮するのだと励まします。

　コリントの信徒への手紙二で一番有名なのは十二章にある次の部分です。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ…わたしは弱いときにこそ強いからです」（九節以下）。

　若松英輔という評論家・随想家に、「弱くあること」と題する詩があります。

もっと強く／なりなさい／世間はきっと／そう言うでしょう／でも本当に／学ばなくてはならないのは／弱くなること／弱くあることなのです／世の中の多くの人たちが／大きな声で笑うとき／　声を出さずに／泣いている人もいるのです／そんな人に／そっとよりそい／だまって横にいられる　／そんな人になってください／

「弱さのちから」より

　私たちが神の言葉を伝える時に聖書の言葉を虚勢を張って伝えても、また水戸黄門の紋章をふりかざすように語っても、十字架と復活の救いを伝えることにはなりません。石に刻まれた固い言葉でなく、私たちの本当に脆い朽ちる肉体を通して恵みを伝えていく。そうすることによって、ひたひたと伝わっていくのです。そうしたことをこの伝道礼拝の中でもう一度自分の歩みを振り返りつつ、共に歩んでまいりたいと願います。

（出席33名。文責・編集委員会。要約・市川義和）